

## 癸卯年の社窓から



令和五年も例年同様、東京の街の上に登るきれいな初日の出を拝みながら幕を開けました。ついこの間の話のようですが、気づけばあつという間に時間が過ぎていきます。本年の干支は癸卯（みずのと・う）。この年を、数と方位を中心にものごとの性質を読む占術・気学の眼をお借りして見てみましょう。

十二支の卯は動物の兎としておなじみですが、「卯」には「芽生えた草木が地面を覆うほどに茂る」という意味があります。時刻として「日の出」の刻を指すこともあり、「あたたかな季節に入り、万物が目覚めていよいよ動きはじめる状態」にあると言えます。

この卯年からはじまる六年間は「陽遁（ようとん）」と呼ばれ、日の出から日の入りまでの、陽がさし活気に満ち満ちている期間。氣の流れが結実へと向かい勢いを増していくため、その起点である今年には「何かを始めるのに最適な年」です。気になる習い事から、大きな夢へ踏み出す第一歩まで、まず動き出してみることが吉と言えましょう。何か事を始めるのに憂いやわだかまりがあつたとしても水に流し、その水さえも栄養として成長を促すのに用いることさえできるかもしれません。

ただ、この氣の流れはどうにも勢いがいいようで、事の善し悪しの方向を問わずに飛び跳ねていつてしまうことがあるようです。兎にも角にも二兎は追わず、ひとつひとつじっくり見定めて、波に乗るまでは手をかけながら進めていきましょう。

この陽遁のはじめにあたる卯年に大口真神さまの式年があり、相對する陰遁のはじめにあたる酉年に式年大祭が定められているのは、それぞれの六年間を無事に過ごせるよう、お見守りをいただけるように、という祈りが込められているのかもしれません。

広く国内や世界に目を向ければ、複雑な社会情勢に騒々しさが増してきているよう。事に大小はあれど、いままでの常識では測れなかったようなことが起こり、あれよあれよという間に進んでいつてしまうかもしれません。悲しいかな現状ではよろしくないことのほうが想起されてしまいがちですが、他方で、今までの枠にとらわれないような、型にはまらないような、面白い物事が出現してくるかもしれません。この激動の時代のさなか、そんな期待も持ちたいと思います。

このお話の結びに。今年と同じ癸卯年の生まれであった、鎌倉幕府三代執権・北条泰時。昨年の大河ドラマでは金剛という名でおなじみであった彼が、著しい成長のうちに中心となって制定した法令・『御成敗式目』の第一条には、こう記されています。

第一条 可修理神社専祭祀事

（神社を修理し祭祀を重んじること）

神者依人之敬増威、

（神は人の敬意により神威を増し、）

人者依神之徳添運

（人は神の神徳により運をいただく）

然則恒例之祭祀不致陵夷、

（すなわち恒例の祭祀に衰退なく、）

如在之禮奠莫令怠慢

（神への御供えに怠慢あるべからず）

この『御成敗式目』自体は、従来の貴族社会と新たな武士社会との対立を経た鎌倉幕府が制定した法令で、御成敗の名の通り、罰則事項や所有権など裁判についての規定が大半を占めます。後の世まで影響を及ぼしたこの法令の、その初っ端の第一条が「神社の勤めをしっかりとやれ」というものなのです。つづく第二条は「寺の勤めをしっかりとやれ」というもの。武家が神仏を大切にしており、自ら神社を直し、時には建てて、厚く信仰し



ていたのは周知の事実かと思いますが、「修理が大規模で大変な場合は幕府に相談すること」と記すほどに大事に思っていたことが窺い知れます。

日々ご信心をいただく方のため、何方かの困った時の神頼みを何時でも受けとめ祈禱に望ませていただくためには、まず神社をお守りさせていただく私たちが、日々祭祀を疎かにせず勤めることが必須。そう教えてくれています。

結びが長くなりましたが、この時代の神職たるもの、襟を正して努めねばと思うのでした。

# 第五十回 武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

応募総数 二百五十五句

選者 蕃目良雨

## 特選

見下ろさば関八州の鷹となり

日の出町 渡邊敏雄

朝日さすみそぎの滝の垂水かな

青梅市 津布久信雄

月涼し湯上りに飲む山の水

府中市 天地わたる

## 秀逸

おいぬ様坐す山の夜の天狼星

宮城野田郡 我妻 遼

重忠の像を若葉の陽が照らす

練馬区 川村能正

御師の庭隙なく蒟蒻芋を干す

東久留米市 斉藤久美子

風に聞く梅のあるらし山のかげ

あきる野市 岩谷良敬

紅葉且つ散るや重忠騎乗像

川崎重厚区 浜田恵子

## 佳作

うんかいのはしごにわたしはのぼったよ

東大和市 石井愛乃

神の宿真神の護符に冬ともし

日野市 玉木 祐

朝露の虫のさざめき鳥の声

台東区 荒川啓太

霧の舞力授かる奥の院

町田市 高橋麻美

露涼しレンゲショウマの揺るる道

武蔵野市 池田章子

朝霞笙の音渡る御嶽山

東久留米市 阿波連光太郎

選者吟 夜もすがら大口真神もがり笛

## 奉納俳句選評

見下ろさば関八州の鷹となり

渡邊 敏雄

一羽の鷹が関八州を見下ろしている  
と見做した雄大な句。武蔵の一角から関  
八州を見守る御嶽神社に相応しい作  
品。

朝日さすみそぎの滝の垂水かな

津布久信雄

厳寒の朝、裸の滝に下がっている水柱  
に朝日が差し込んださまを詠む。身の  
引き締まる作者の心が伝わる。

月涼し湯上りに飲む山の水

天地わたる

宿坊の夏の夜の景色。一日の修行を終  
えて入浴した後に飲む山の水の旨さが  
伝わる。酒でなく水を飲むことに潔斎  
の気持ちが持続している。

昭和四十八年より始まった奉納俳句  
は、今年でちょうど半世紀・五十年が  
経つ節目の年です。これまで山の景色  
を切り取った数々の名句が詠まれたこ  
とと思います。五十年という時間、変  
わらない営みが過ぎていくようですが、  
茅葺き屋根は減り、祭典の様子も少  
ずつ変わっています。また野鳥の囀り  
も良く聞いた声を聞かなくなったり、  
天然記念物の二ホンカモシカが身近に  
なったりと自然環境も変わりました。

俳句は、その瞬間を五七五の短い言  
葉で切り取り、情緒も風景も表現され  
る素晴らしい文化です。近年コロナ禍  
の影響もあり投句数が減っておりま  
す。御岳山にお越し頂いた際は、楽し  
い思い出をぜひ十七文字に載せ投句し  
てはいかがでしょうか。

## 第五十一回

### 奉納俳句募集要項

- 一、作品は未発表に限る
- 一、受付は指定用紙にて投句箱へ  
(郵送等直接の受付は致しません)
- 一、締切り 令和六年一月十五日
- 一、発表 令和六年三月中旬
- 四季を通じ「御岳山を題材」とした  
俳句を募集しております。
- 大勢の方の投句をお待ち申し上げて  
おります。